

Tさんが望んだことだから…

二〇〇二年五月のある日、唐突にTさんがこう言いました。「オラはここで死ぬ。だから葬式もここでする」

急にどうしたのだろうと思いつつ、「いいよ。最期までここにしようね」と、私は答えました。

その当時の下宿人四人とは、それぞれに闘い（？）がありました。心構えのないままに受け入れてしまったTさんとの闘いは、振り返ってみると確かに「凄（すさ）まじい」といえるものでした。

「はんかくやう」と言われ、「こんな女は相手にできない」と言われ、揚げ句の果てに

「生意気言うなら、この家から出て行け！」と怒鳴られる。

そのような毒が口から吐かれるたびに、「どうしてこんなことになったのだろう？」と後悔する日々もありました。

そのTさんが、こんなことを言ってくれるなんてと、ジーンとしながら、

「どのようなお葬式をしたいのですか？」と問うと、「そうだね、飲んでもらうの」と答えました。詳しく聞くと、お葬

式に来た人にTさんの大好きなビールを飲んでもらうことで、「これまでありがとう」という感謝の気持ちを示したいということのようでした。話を聞きながら(Tさんの葬儀をするにはここは狭すぎるし、その前に最期の看取りをするにはここでは落ち着かなさすぎるし……)と考えているうちに、「そうだ！ Tさんの看取りをして、お葬式もあげられる新しい家をつくらう」という決心を

NPO法人在宅生活支援サービスホーム花風

木村美和子理事長



花風屋繁盛記

連載10

人と人がつながって

望めば叶うこともある

新しい家をつくらうと決心したものの、元来おっちょこちょいの私です。「家ってどうすれば

探し、土地探しも行っ

つくれるんだろう？
どんな大きさで、どんな間取りで、お金はどれくらいかかるんだろう？と考えているうちに、一番大事な建設資金がないことに最後に気づいたのでした。
私の座右の銘は「望めば叶（か）な（う）こともある」です。望みに近づくためには、まず行動あるのみ。そう考えて、助成金、金融機関の融資など何件か当たってみましたが、どれも不調でした。

資金調達と同時に家探し、土地探しも行っ



花風2号館。ここは家であり、住むのは家族であり、そこは暮らし、暮らす場所

花風設立を準備していた時期、家族三人で陶芸工房に通っていました。夫と娘はなかなか「お上手」だったのですが、私は下手くそで、土を丸めて遊んでいるうちにいつの間にか面白い造形が仕上がっていました。

「これなりに？」人を憩わせたり、思えば何にでもなれるの」と思いつくまゝに話しました。その時、「花風みたいだね」と言った娘の言葉で、「そうだ、そうだこれを花風のマスコットにしよう！」

自分らしく生きられる場所

ていまして、これもに耳を傾けてくれるの「帯に短し襷（たすき）ではないかと思つたかに長し」で、なかなか希らでした。融資が決定望の物件に巡り合えたのはそれから三ヵ月後のことでした。

二〇〇二年十一月一日に地鎮祭が執り行われる日、偶然「売地」の看板を目にしました。バ板を目にしました。ス通りに面したそこは、住むことになる土地に花風一号館から歩いて五分の距離。雑草の生い茂った土地でした。私はここに新しい下宿の建物を思い描きは進められました。寒いので降雪の中で形を為して、花風二号館の工事を始めました。あの一言がなかつたら二号館は存在せず、二号館で生まれた新たな出会いもなかつただろうと、Tさんに感謝せずにはいられませんでした。

さて、実はこの時点で七人となっていた下宿人。雑魚寝がやっと解消されるかと思つたのですが……。

ある「です。望みに近づくためには、まず行動あるのみ。そう考えて、助成金、金融機関の融資など何件か当たってみましたが、どれも不調でした。

資金調達と同時に家探し、土地探しも行っ

「帯に短し襷（たすき）ではないかと思つたかに長し」で、なかなか希らでした。融資が決定望の物件に巡り合えたのはそれから三ヵ月後のことでした。

二〇〇三年四月二十五日、花風二号館が完成して引き渡しが行われました。どこもかしこもピカピカで広々とした。建った。建った。建った。建った。「バンザイ、バンザイ」という具合の当日でした。

五月六日に引越しを行い、この日から下宿の機能は二号館へ移されました。Tさんが「ここで死ぬ」と宣言してから、ほぼ一年後のことでした。振り返ればTさんの一言で花風下宿が生まれ、再びTさんの一言から二号館が新築されたのでした。あの一言がなかつたら二号館は存在せず、二号館で生まれた新たな出会いもなかつただろうと、Tさんに感謝せずにはいられませんでした。